

私の時代

「私の時代」

安藤まさひろ（トースクウエア／リ
ーダーギター）(652年卒/MC)

私が大学に在学していた70年代の中頃は、ロック、ポップス、そしてジャズといったジャンルの中で、大変勢のある時代でした。中でもジャズは60年代後半、中学、高校、ビートルズやツェペリン、クリームなどのロックミュージックに傾倒していた私にとって、とても新鮮で魅力的な音楽でした。そしてジャズと
言う言葉の響き、一種のインテリジエンスというが、大人のおいさを醸
ざとっていたのも確かです。

友人の勧めで聞いた、マイルス・デイビスの「ジャック・ジョンソン」ピッチェスプリュークをきくにつけに、私はほとんどジャズにのめり込んでいきました。あつという間でした。それからまさにジャズとロックの融合で、それまでロックしか聞いたことのない人間を、簡単にジャズの世界に引っぱり込んでしまふ、えも言われぬパワーを音楽が持っていたのだ
と思います。

日本のジャズを取り巻く環境も、若い私にとって刺激的でした。故郷の名古屋には、学生ミュージシャンとプロミュージシャンのセッションの場が何軒もありましたし、また才能の多い学生が集まっています。又渡辺貞夫カレッジに、当時早稲田大学の学生だった増尾好秋や鈴木良夫らが抜擢されたのも、それほど古い話ではありません。私の一年先輩にあたる渡辺晋津英が、天才ジャズ



ギターリストとしてレコードデビューしたのは、なんと17歳の時です。ジャズ、フェスティバルと路打った野外コンサートが、各地で催されるようになり、多くの外タレが生で見られるようになりました。ですから私が明治大学を受験したのも、東京でジャズを勉強したいが為でした。入部したジャズ研で、将来あわよくばプロになることを考えていた部員も、一人や二人ではなかつたはず。それほどジャズという音楽に活気があり、夢と希望に満ちていたわけ
です。



それにして私の学生生活に、まずお金はありませんでした。5年間？受けた講義にもまったく記憶がありません。色恋にも縁遠かった訳です。出会った友人、先輩、後輩は皆素晴らしい人ばかりでした。そしてその誰もが、何らかの形で音楽を通じて知り合った人達であり、現在私がこうして音楽を作っているのも、大学在学中に出会ったジャズと言う音楽と、その人達のおかげだと思っています。

ミュージック・スポット

DSSO (BASSO OBバンド) — LIVE REPORT
二井康夫55年卒 / BSSO

BSSO 30歳前後？のOBを中心に結成したDSSOと、スウィング、駿河台、オーケストラが今年3月24日(日)新宿セントラルパークに出演しました。

ミュージックコンセプトは「魂、入れませぬ。PAなしの生音」

メンバー(18人)構成は現役で活躍中のジャズ・ミュージシャン(5人)と極めて平凡なサラリーマン、それではライブの模様をレポートします。

ファースト・ステージ カウント・ベイシシーのご存じ「フーミー」、オレンジャー・シャベットで早くも満員のホールはヒートアップ。2番ラップ、リードアルト、セカンドテナー、ベースにロフが入るとグルーヴする。エンド・サッツ・サット、「ニティス」モーションと続き、

佐久間(tp)をフィーチャリングした「ペンシブミス」では場内に大きなどよめきが……。山野ヒロクバントコンテストで最優秀ソロイスト賞に輝き、光り輝く長瀬琢磨のドラマムロ、谷口英治、竹内直の熱いサックスバトルをばさんだ。ヤガッタ、トワイであつと言つ間に

第一部分が終了。セカンド・ステージ中盤、セロ・オル・スターズ・ピージグバンドからニスター・セイディ、うなるベラス安川大樹、荒れ狂うポント口相楽賢哉、谷口英治のクラリネットをフィーチャリングした「ブルバ&センチメンタル」ではバンドメンバーからも熱い声援が。

ラストは「ベイシシー」MCにのせられて観客立ち上がり止め拍手の中、アンコール「ヒュー・ツ・オン」でめ



でたく中。忙しい中出演してくれたプロ・OBの方々、練習場を借して頂いた現役の皆様、楽友会の諸先輩方、本当にありがとうございます。

DSSOメンバー(太字はプロ)
tp 菊池成浩(2年卒)、佐久間隆(5年卒)、源資(2年卒)、天野文彦(55年卒)、伊東盛(6年卒)、八野浩之(54年卒)、相楽賢哉(元年卒)、小島伸之(7年卒)、井上太郎(3年卒)、二井康夫(55年卒)、谷口英治(3年卒)、竹内直(55年卒)、菅野ヒロシ(現役)、荒木洋一(5年卒)、横川武(5年卒)、長瀬琢磨(4年卒)、ベラス安川大樹(2年卒)、D 福本洋55年卒

メランコリー・キャッツOB 第一回 六本木セッション
井田隆一(55年卒/MC)

去る7月6日(土)メランコリーキャッツOB(現役も含めて)の初めてのセッションが六本木リラクシんでありました。かねてより店長麻生氏と交流のあった61年卒の折田氏(ベース)や同61年卒の荒川氏(トランペット)が、アマチュアバンドの発表の場を兼ねて、OBバンドや現役バンドの交流や、お互いのセッションができればという事で、交渉をすすめ、ついに現実のものとなりました。

ただ、ふだんこのお店は、プロのミュージシャンが出演しているという事で、私達OBバンドが、あまりひどい演奏をもしようものな

せつかくの計画も最初で最後になりかねないし、何よりも大切な事は、お店にいかにか人を集めるかが、今後のことを含めての成功の鍵になるとのプレッシャーから、短期間ではありましたが、管轄特に関員には、真剣に取り組んだようであります。



当日は、まず手始めに、OBバンド(お姉様配つて)が、お姉さん十ヒアノトリオでジャズのスタンダードナンバー(マイ・フーリッシュ・コ・ハート)などを立て続けにヒット、あつという間の40分。続いて、OBバンド(テナー・井田アンド・フレンズ)が、別のお姉さん十ヒアノトリオで、負けじと、ギター十ヒアノトリオで、負けじと、ミーなど)で感戦、ついにエノケンの歌まで飛び出し、これも、あつという間の40分。続いて、現役メランコリー・キャッツが、3管十ギター十ヒアノトリオで、これがダンモだと言わんばかりのフルリスを連発、OBバンドを力で圧倒、最後は、その勢いで、大ジャムセッション大穴に突入。楽器を持って来たものは勿論のこと、そうでないものも、入れ代わり立ち代わりで大盛り上がり(ハーカーからフレイキー)なども飛び出し、あつという間に4時間がすぎました。最後に、荒川氏よりこれからも、こういう機会をなるべく作つて、皆さんとの交流を深めたいとの挨拶があり、お閉きとなりました。結果は上々、動員も予想以上で、まずは成功といつていいでしょう。皆さん、お疲